

近代日本における家族の教育戦略に関する一考察 —旧中間層と新中間層の比較を中心に—

多 賀 太
山 口 季 音¹⁾

1. 問題の所在

本稿は、大正期生まれの経済エリートの自叙伝を資料として、当時の家庭教育²⁾の担い手とその具体的なあり方を、階層再生産戦略との関わりで明らかにしようとするものである。

近代日本の子育てに関する従来の研究においては、時代が下るにつれて母親が子育ての主たる担い手になっていき父親は子育てにおいて周辺化されていったことが定説とされてきた。その根拠としては、第1に、医学書や育児書、家庭教育に関する雑誌や高等女学校の教科書などで、母性や母親による子育ての重要性が強調されていったこと、第2に、学校教育の拡大に伴い、家職の伝承を内実とした父親主導の教育が衰退し、家族における教育が学校教育の補完としての「家庭教育」へと特化していったこと、第3に、性別分業を基本とした核家族で生活する新中間層の拡大により、日常の子どもの世話や教育を担えるのが母親だけである家族が増えていったことなどが指摘されている。

しかし、従来の研究には、次のような課題も見られる。第1に、上記の定説は、主として当時の刊行物の規範的記述に依拠したものであり、必ずしも実態が調べられているわけではない(沢山1990, 小山1990, 広田1999, 海妻2004)。第2に、実際に誰がどのような教育を家庭で行っていたのかについては、主として特定事例の検討か明治末期までの趨勢の検討かにとどまっており、大正期以降の実態について十分に明らかにされていない(吉田1953, 小山・太田2008)。第3に、各研究において焦点を当てている「教育」の側面がまちまち

である。

筆者らは、本研究に先立ち、これらの課題の克服を試みてきた。まず、筆者の1人である多賀は、日本経済新聞社編「私の履歴書 経済人」全38巻に掲載された243点の自叙伝うち、1875年から1933年までの同一年生まれの著者の作品の中で執筆時期が最も早かった57作品を抽出し、家庭教育の内容を、表1-1に示した上位3×下位3の計9カテゴリー、すなわち《進路形成》(《進学指南》《職業指南》《職業教育》)、《知育》(《学識伝達》《文化伝達》《外部資源利用》)、《その他》(《徳育》《体育》《世話》)に分節化したうえで、時代によるその担い手の変化を検討した。その結果、①《知育》全般と《徳育》《世話》に関しては、先行研究の定説通り時代とともに母親の関与の度合いが高まっていたが、②《進路形成》全般については昭和初期まで父親主導であり、③《徳育》や《文化伝達》についても昭和初期まで父親も母親に劣らず関与していた様子がうかがえた(多賀2014)。

表1-1 家庭教育のカテゴリー

上位カテゴリー	下位カテゴリー	定義
《進路形成》	《進学指南》	上級学校への進学について、希望を伝えたり、アドバイスをしたり、命令したりすること
	《職業指南》	就くべき職業について、希望を伝えたり、アドバイスをしたり、口利きをしたり、命令したりすること
	《職業教育》	息子が将来就くであろう職業を見越して、実際に仕事を手伝わせたり、その仕事に直結することを経験させたり、直接手ほどきをしたりすること
《知育》	《学識伝達》	学問的な知識や学校教育に関わる知識を直接授けること
	《文化伝達》	学術的知識や学校教育に直接関係する知識以外に、教養を深めたり見識を広げたりという趣旨で親が直接手ほどきをしたり学びの機会を与えたりすること
	《外部資源利用》	家族成員の意志により、家庭教師や教育産業などを利用し、正規の学校教育でも家族成員による教育でもない方法で、学業や文化に関する学びの機会を子どもにも与えること
《その他》	《徳育》	日常生活における礼儀作法のしつけから人間の生き方に関わる思想にいたる規範や価値観を教え諭す行為
	《体育》	健康の増進や強靱な肉体の形成を目指して身体的発育を促そうとする働きかけ
	《世話》	乳幼児期から成人して自立するまでの様々な身の周りの面倒を見ること

さらに、筆者らは共同で、「回顧的に構築される個人史」という自叙伝の性質をふまえ、執筆時点の時代状況の違いがその記述内容に影響を及ぼしていないかどうかを確認するため、1875年から1933年までの同一年生まれの著者の作品の中で、今度は、執筆時期が最も遅かった57作品(平均10.5年遅い)を抽出して多賀(2014)と同様の分析を行い、執筆時期が最も早かった57作品の分析結果と比較した。しかし、両者の間で結果に大きな違いは見られず、少なくとも「私の履歴書 経済人」のシリーズに限れば、執筆時点の時代状況が家庭教育の担い手に関する記述に重大な影響を与えていないことが確認された。

筆者らのこれまでの研究は、明治初期から昭和初期までの約60年の間、家族の誰がどのような家庭教育を担っていたのかに関する個別事例と長期的変遷の両方を検討したものであった。しかしそこでは、家庭教育の具体的あり方やそれを誰が担うかということが家族の階層再生産とどのように関わっているのかについては十分に踏み込んだ分析ができなかった。本稿は、この課題に応えるための1つの試みである。

2. 分析の対象と方法

分析に使用する自叙伝のシリーズとしては、これまでの研究と同様に「私の履歴書 経済人」全38巻を用いた³⁾。自叙伝に記された情報は、著者の人生経験のうち、著者が執筆時点において記憶している情報の中から選択したものであり、著者の主観性と歴史社会的拘束性を帯びているという点で、それをそのまま客観的な事実として扱うことには慎重でなければならない。しかし他方で、自叙伝には、現実に起こった出来事を著者がどのように認識・経験したのかが当人の生活に根ざしたかたちで生き生きと描かれており、家庭教育のように公的記録としてほとんど残されることのない過去の現象を把握するうえで貴重な資料である。

今回は、1912年から1926年の間の大正期に生まれた全著者60名分の自叙伝を分析対象とした⁴⁾。対象著者を大正期生まれに限定したのは、子どもの教育に熱心な「教育家族」(沢山1990)の先駆けとされる新中間層の階層再生産戦略

の特徴を明らかにするうえで、新中間層の人口比率がより少なかった明治期 (Kinmonth 1981=1995: 256-267) や、太平洋戦争の影響により社会生活が大きく混乱していた昭和初期と比較した場合、大正期が最も適した時代だと考えたからである。

分析は次の手順で進めた。

第1に、60点の自叙伝を読み、著者の基本的属性、家族生活、教育、職業達成に関わる事項を1人1シートに記録していった。

第2に、対象者の出身階層を、幼少期の父親の職業に基づいて、子どもに直接引き継ぐことができる職業的家産を有しているかどうか、という観点から2つのグループに分類した。その結果、会社経営、自営業、農家など、子どもに直接引き継ぐことができる職業的家産を有する家族の出身者が28例あり、これらを〔旧中間層〕と分類した。他方で、そうした家産を持たないが、父親が現業職ではなく、たとえば、ホワイトカラー、軍人、官僚、専門職などである家族の出身者が32例あり、これらを〔新中間層〕と分類した。

第3に、家庭教育の具体的内容を、先述の多賀 (2014) と同様の方法を用いて、《進路形成》(《進学指南》《職業指南》《職業教育》)、《知育》(《学識伝達》《文化伝達》《外部資源利用》)、《その他》(《徳育》《体育》《世話》) という上位3×下位3の計9カテゴリーに分節化し、各事例においてそれぞれを家族の誰が担っていたのかを記録していった。

第4に、各自叙伝の記述から、対象者の家族における子どもの地位達成戦略の共通点と相違点に注目しながらそれらの類型化を試みた結果、次の4つの類型が析出された。息子に父親の職業的地位をそのまま継承させようとする「①特定地位継承」、父親の職業的地位を継承させる意図はないが息子を家業に迎え入れようとする「②特定地位提供」、直接継承できない父親の職業的地位に息子を就かせるために学歴・資格取得を促す「③特定地位達成」、父親の職業的地位を継承させることにこだわらず、学歴・資格取得を通じた地位達成を息子に促す「④一般的地位達成」である。この4類型に当てはまらない事例を「⑤その他」として、60件の自叙伝を子どもの地位達成戦略のタイプ別に分類した。

第5に、対象者の基本的属性と家族に関する基本的情報、新聞掲載とシリーズの掲載巻に関する情報、上記9カテゴリーに相当する家庭教育を受けた経験の有無とその担い手に関する情報、地位達成戦略、教育と地位達成に関する特記事項を、〔旧中間層〕と〔新中間層〕の別に一覧表に表した。

表2-1は、〔旧中間層〕出身対象者についての一覧、表2-2は、〔新中間層〕出身対象者についての一覧である。これらの一覧と、最初に作成した各自叙伝の記録シート、さらに必要に応じて自叙伝の本文も参照しながら、出身階層別に、家庭教育の具体的なあり方とその担い手、ならびにそこからうかがえる子どもの地位達成戦略と進路形成のあり方を検討していった。

以下では、第3節で家庭教育の内容と担い手に関する全体的傾向を両階層間で比較し、第4節と第5節では地位達成戦略と教育戦略のそれぞれについて個別の事例にも触れながら両階層の特徴を明らかにする。

3. 家庭教育の内容と担い手

では、今回対象とした各自叙伝における記述をもとに、大正期から昭和初期の家族において、誰がどのような家庭教育を担っていたのか、またそれらに関して階層による違いが見られるのかどうかを検討してみよう。なお、紙幅の都合により、本節では、前節で示した家庭教育の9カテゴリーを用いて、全体的な傾向と両階層間での共通性と相違に関する情報を集約的に述べるにとどめ、家庭教育の具体的様子については第4節と第5節で述べることにする。最初に、全9カテゴリーを総合して家庭教育の全体的傾向を確認した後、カテゴリー別に家庭教育への言及頻度とその担い手の特徴を両階層間で比較する。

(1) 家庭教育の全体的傾向

まず、家庭教育への言及件数とその担い手の特徴について、〔旧中間層〕と〔新中間層〕で比較してみよう。表2-1と表2-2の右側には、家庭教育の9カテゴリーに該当する実践のうちどれに言及があったのか、また言及があった場合それらを誰から受けたと記述されていたのかを示している。これらの情報を集約し、

表2-1 〈旧中間層〉の基本的属性と家庭教育

事例番号	生年	氏名	肩書き	新聞掲載年	掲載巻	執筆開始年齢	生育地域	最終学歴	父出自・学歴・職歴	母出自・学歴・職歴	進路形成		知育		その他		教育・地位達成に関する特記事項			
											進学指	職業指	学歴伝	文化伝	外部資源利用	徳育		体育	世話	
A1	1912	明治45	菊地庄次郎	日本郵船会長	1984	22	72	仙台・市街	東大経	呉服屋→製紙工場社長	伊達藩士の娘	父	父	—	父	—	—	—	「普通の学校」に行きたくて商業学校に行きたい父と対立。母は彼に味方。父の意向により、歴史・哲学を諦め経済に。	
A2	1912	大正1	田崎健	積水ハウス社長	1985	23	72-73	大阪・市街	東大経	町内を仕切る	町内の女親分	父・兄	兄	—	—	—	—	—	幼少期に父母死去。兄・姉が親代わり。	
A3	1912	大正1	森野福次郎	TDK会長	1986	24	73-73	神戸・市街	神戸高等工業(中退)	須賀紹介職員→水道工事業	履修で行儀見習い、鐘紡社長のもとで奉公	父	父	—	—	—	母	—	読書の習慣は叔母の影響。	
A4	1913	大正2	豊田英二	トヨタ自動車会長	1984	22	71	愛知・郊外	東大工	機械工場経営	(6歳頃に死去)	—	父	父	—	父	—	—	帝王学教育。	
A5	1913	大正2	水野健次郎	美津濃社長	1987	25	73	大阪・市街	阪大理	丁稚奉公→美津濃創業	経問屋の娘、同志社女専英文科卒	父	父	—	父	—	父・母	—	帝王学教育。実母は24歳で死去。継母を実母と思って育つ。	
A6	1913	大正2	鈴木治雄	昭和電工名誉会長	1989	26	76	東京・市街	東大法	味の素社長	不明	—	父	—	父	—	父・母	—	算数、化学の疑問を子どもに出す父。「商売人」にさせると繰り返すも、他人様の迷惑にならぬよう勉強しろと諭す。	
A7	1914	大正3	中山晋郎	コスモ石油会長	1992	29	78	東京一長野	福島高商	染色工場支配人	実家は薬局兼小売店	—	母	—	—	—	—	—	母方祖父のもとで暮らす。母は愛憎のすべてを注ぐ。叱ることも勉強の押しつけもなし。母の手伝いをして家事を習う。	
A8	1914	大正3	横河正三	横河電機名誉会長	1996	32	82	東京・市街	慶大経	東大→三井→横河グループ創始者	儒者の家の娘	父	父	父	—	—	母	—	帝王学教育。兄二人とは違う指導。無理強いはないが、後継者として期待。両親の方針で幼稚園から大学まで慶応。	
A9	1915	大正4	大社親規	日本ハム社長	1984	22	69	香川・郊外	高松高商(中退)	地主→没落	不明	—	—	—	—	—	—	—	具体的記述なし。	
A10	1916	大正5	竹田弘太郎	名古屋鉄道社長	1980	19	62-63	愛知・郊外	早大商	町長・教師・銀行家	不明	父	父	—	—	—	父	—	あらゆる教育が銀行を継がせるもの。しかし彼は彼の道を。	
A11	1916	大正5	梁瀬次郎	ヤナセ社長	1984	23	78	東京・市街	慶大	梁瀬自動車創業者	府立第一女学校卒業後、結婚	—	父	—	父・母	—	父	—	幼稚園から大学まで慶応。父の影響は絶大だが、経営者としても、人間としても反面教師。母が味方。	
A12	1916	大正5	黒田曜之助	コクヨ会長	1986	24	69-70	大阪・市街	慶應高等部	代々続く商家の主人	庄屋の娘	—	—	—	—	—	母	—	子どもに構う暇はないが、礼儀作法だけはやかましい。商家で家庭があるやらないやわからぬ環境。	
A13	1916	大正5	五島昇	日本商工会議所名誉会頭	1989	26	72	東京	東大経	農家二男→官吏→電鉄専修→運輸大臣	実家は大家邸。女子学院卒	父	—	—	父	—	—	—	母は5歳で死去。小中時代父はほぼ不在だったが夏休みにには父と山へ。精神的に父に強い影響を受けた。	
A14	1917	大正6	尾尾忠雄	カシオ計算機相談役	1991	28	73	高知・農村	早稲田工学校	農家。副業で焼物→東京で大工。左官、商い→すぐに領士	農家の経験なく農家に嫁入り。内職や御用聞きで手間賃を稼ぐ	父・母	—	—	—	—	—	母	両親の愛情をいつも背中に感じる。自分たちが受けられなかった教育、地位達成を、息子に託す。	
A15	1918	大正7	鬼塚喜八郎	アシックス社長	1990	27	72	鳥取・農村	鳥取第一中	農家・地主	(働き者)	—	—	祖父	—	祖父・母	—	祖父の時代は村有数の豪家に。父は異常小卒のため、祖父は孫に期待。長兄は県唯一の中学に入学。厳しいつけ。		
A16	1919	大正8	春名和雄	九紅会長	1990	28	70-71	横浜→神戸	東亜同文書院	生糸商	(厳しい人)	—	父	—	—	父	—	—	関東大震災で家を失い横浜から神戸に。父は株と米相場で損を出し没落。経済的理由で高校進学を断念。	
A17	1919	大正8	佐治敬三	サントリー会長	1993	29	73	大阪・郊外	阪大理	寿屋(ウイスキー)	四国の下級士族の娘	父	—	—	—	母	—	—	当時の大阪の商家は通常子どもに高等教育を受けさせなかったが、父は教育に少なからぬ関心。	
A18	1920	大正9	塚本幸一	ワコール会長	1990	27	70	仙台・市街	八幡商業	繊維商	父と家業	—	母	父	—	—	—	—	本家としてのしがらみで大成できない父。本家を見返して父を助けてやれという母の言葉の影響大。	
A19	1921	大正10	石橋信夫	大和ハウス工業会長	1991	28	70	奈良・山村	吉野林業	植林・製材業	不明	—	父	父	—	—	—	—	「理屈は学校で、実地は家業で」が父の口癖。幼少期から家業を相手手伝わされる。	
A20	1921	大正10	村田昭	村田製作所会長	1993	30	72	京都・市街	京都第一商業(中退)	焼物屋で奉公→田畑を売って零細陶器工場経営	遊覧の豪農から没落→小学2年で京都に奉公→父と家業	父・母	—	—	—	—	—	—	両親無学のため、子どもの教育への意思が強く、上級学校への進学を熱心に勧める。貧しくも大切に育てられる。	
A21	1921	大正10	坂倉芳明	三越相談役	1997	33	76	東京・田町	慶大経	板倉家へ婿入り。NEC勤務→祖父から継いだ土地の家作で生活	子どものとき板倉家に養子	母	父	—	—	—	父	父	—	継父慈母。母は、体が弱いことを心配し大学まで受験なしで行ける慶應を勧める。就職は親のコネ。
A22	1922	大正11	鈴木英夫	兼松名誉顧問	1996	32	74	静岡・御殿場	東京産業大	老舗の旅館経営	旅館の仕事に慣れず、厳しい労働に苦勞	—	—	—	—	—	—	母	—	学歴への期待はあるが、具体的教育の記述なし。末子だからか。教育・世話は母の役割だったようだが、健康を気遣って無理強いせず。上のきょうだいの影響大。
A23	1922	大正11	中内功	ダイエー会長	2000	35	78	大阪・西成	神戸高商	鈴木商店退社後、薬局を開き失敗。祖父の眼科で薬剤師	宮司の親戚筋	父	—	父	—	—	—	—	—	父は教育熱心だったが、それだけの道を歩むことを見守ってくれた。結果的に商人としての父の影響。
A24	1923	大正12	石井久	立花証券会長	1993	30	70	福岡・山村	尋常小学校	小農(背負いで悪直)	(視順で聡明)	父	父	父	—	—	—	—	—	父は学問に理解を示さず進学に反対。
A25	1924	大正13	小倉昌男	ヤマト福祉財団理事長	2002	37	77	東京・代々木	東大経	青果売りから大和運輸を興す	不明	—	—	—	—	母	母	—	父は短気で、子どもには優しくなかったが、社員や母には乱暴で怖かった。母は教育熱心。家は裕福だがそれをひけらかすことを戒める。継母の文化資本の影響大。	
A26	1924	大正13	岡田茂	東映相談役	2002	38	78	広島・西条	東大経	酒問屋	不明	—	父	—	父	—	—	—	—	7歳で祖父の養子に。両家を頻りに行き来。養父母の教育方針は放任主義。
A27	1924	大正13	伊藤雅俊	イトーヨーカ堂名誉会長	2003	38	78	東京・目黒	横浜市立商専	川島証券勤務後、母と商売を始める	豪商の娘だが、父が若死にして没落	父	兄	—	—	—	—	母・兄	—	中4のとき両親が離婚。父は反面教師。母と兄は商人の體、兄が父親代わり。
A28	1926	大正15	徳口広太郎	アサヒビール名誉会長	2001	36	74	京都・出町	京大経	布田屋の婿養子	不明	—	父	—	祖母	祖母	—	父・祖母	—	子どものことを心配して世話をする父。祖母に教養があり、手習いを教えてくれた。父が旋盤工として徴用されて家業を閉めたため家を継がなくてよかった。

出生順位 [きょうだい構成]	地位達成戦略 [→結果]	進路形成		知育		その他		教育・地位達成に関する特記事項	
		進学指	職業指	学歴伝	文化伝	外部資源利用	徳育		体育
二男[兄(夭折)、姉2人、弟1人]	特定地位継承[→他職]	父	父	—	父	—	—	—	「普通の学校」に行きたくて商業学校に行きたい父と対立。母は彼に味方。父の意向により、歴史・哲学を諦め経済に。
末子[兄1人、姉6人]	不明(幼少期父母死去)	父・兄	兄	—	—	—	—	—	幼少期に父母死去。兄・姉が親代わり。
長男[姉2人]	特定地位継承[→他職]	父	父	—	—	—	母	—	読書の習慣は叔母の影響。
[兄夭折]	特定地位継承[→同族他企業]	—	父	父	父	—	—	—	帝王学教育。
二男[兄1、姉1]	特定地位継承[→継承]	父	父	—	父	—	父・母	—	帝王学教育。実母は24歳で死去。継母を実母と思って育つ。
五男[男8、女1]	一般的地位達成(実業家)[→達成]	—	父	—	父	—	父・母	—	算数、化学の疑問を子どもに出す父。「商売人」にさせると繰り返すも、他人様の迷惑にならぬよう勉強しろと諭す。
記述なし	不明(5歳のとき父死去)	—	母	—	—	—	—	—	母方祖父のもとで暮らす。母は愛憎のすべてを注ぐ。叱ることも勉強の押しつけもなし。母の手伝いをして家事を習う。
末子[男3、女4(姉2人は夭折)]	特定地位継承[→継承]	父	父	父	—	—	—	母	帝王学教育。兄二人とは違う指導。無理強いはないが、後継者として期待。両親の方針で幼稚園から大学まで慶応。
二男[姉1、兄1、姉2、弟2]	不明	—	—	—	—	—	—	—	具体的記述なし。
記述なし	特定地位継承[→他職]	父	父	—	—	—	父	—	あらゆる教育が銀行を継がせるもの。しかし彼は彼の道を。
二男[2男5女]	特定地位継承[→継承]	—	父	—	父・母	—	父	—	幼稚園から大学まで慶応。父の影響は絶大だが、経営者としても、人間としても反面教師。母が味方。
長男[弟5姉3]	無領者[→特定地位継承]	—	—	—	—	—	母	—	子どもに構う暇はないが、礼儀作法だけはやかましい。商家で家庭があるやらないやわからぬ環境。
長男[姉2弟1]	後継候補の弟が死去[→特定地位継承]	父	—	—	父	—	—	—	母は5歳で死去。小中時代父はほぼ不在だったが夏休みにには父と山へ。精神的に父に強い影響を受けた。
長男[姉2弟3]	一般的地位達成	父・母	—	—	—	—	—	母	両親の愛情をいつも背中に感じる。自分たちが受けられなかった教育、地位達成を、息子に託す。
末子[3男2女]	一般的地位達成	—	—	祖父	—	—	祖父・母	—	祖父の時代は村有数の豪家に。父は異常小卒のため、祖父は孫に期待。長兄は県唯一の中学に入学。厳しいつけ。
長男[弟1姉1]	一般的地位達成	—	父	—	—	—	父	—	関東大震災で家を失い横浜から神戸に。父は株と米相場で損を出し没落。経済的理由で高校進学を断念。
二男[兄1弟1]	特定地位継承[→継承]	父	—	—	—	母	—	—	当時の大阪の商家は通常子どもに高等教育を受けさせなかったが、父は教育に少なからぬ関心。
不明	特定地位継承[→継承]	—	母	父	—	—	—	—	本家としてのしがらみで大成できない父。本家を見返して父を助けてやれという母の言葉の影響大。
五男[9人中7番目]	特定地位提供	—	父	父	—	—	—	—	「理屈は学校で、実地は家業で」が父の口癖。幼少期から家業を相手手伝わされる。
二男[兄(夭折)、4男1女]	特定地位継承[→継承]	父・母	—	—	—	—	—	—	両親無学のため、子どもの教育への意思が強く、上級学校への進学を熱心に勧める。貧しくも大切に育てられる。
長男: 姉3弟1	不明	母	父	—	—	—	父	父	継父慈母。母は、体が弱いことを心配し大学まで受験なしで行ける慶應を勧める。就職は親のコネ。
末子[2女7男]	不明	—	—	—	—	—	—	母	学歴への期待はあるが、具体的教育の記述なし。末子だからか。教育・世話は母の役割だったようだが、健康を気遣って無理強いせず。上のきょうだいの影響大。
長男[4男]	一般的地位達成	—	父	—	—	—	—	母	父は教育熱心だったが、それだけの道を歩むことを見守ってくれた。結果的に商人としての父の影響。
五男で7番目[8男5女]	特定地位提供[→他職]	父	父	父	—	—	—	—	父は学問に理解を示さず進学に反対。
二男[姉1姉3弟1、兄と弟1死亡]	不明[→特定地位継承]	—	—	—	—	母	母	—	父は短気で、子どもには優しくなかったが、社員や母には乱暴で怖かった。母は教育熱心。家は裕福だがそれをひけらかすことを戒める。継母の文化資本の影響大。
二男[4人きょうだい]	放任主義	—	父	—	—	—	養父	—	7歳で祖父の養子に。両家を頻りに行き来。養父母の教育方針は放任主義。
二男[父違いの兄1と、姉3人]	特定地位提供[→兄の死で特定地位継承]	兄	—	—	—	—	母・兄	—	中4のとき両親が離婚。父は反面教師。母と兄は商人の體、兄が父親代わり。
長男[姉1]	特定地位継承[→家業廃業により他職]	—	父	—	祖母	祖母	父・祖母	—	子どものことを心配して世話をする父。祖母に教養があり、手習いを教えてくれた。父が旋盤工として徴用されて家業を閉めたため家を継がなくてよかった。

表2-2 〈新中間層〉の基本的属性と家庭教育

事例番号	生年	氏名	肩書き	新開掲載年	掲載巻	執筆開始年齢	生育地域	最終学歴	父学歴・職歴	母出自・学歴
B1	1912	明治45 藤田龍夫	日本債券信用銀行会長	1991	28	79	東京・郊外	京大法	東大法科卒→大蔵省局長、文部大臣	松山中学校長の娘
B2	1912	明治45 石原俊	日産自動車相談役	1994	31	82	東京・市街	東北大	薩摩出身、役所勤め→弁護士→区議会議員	女学校で助教、算術が好き
B3	1912	大正1 磯崎敬	サンシャインシティ相談役	1990	27	77	東京・市街	東大法	英国留学経験軍人で造船技師	美術学校で絵を学ぶ
B4	1912	大正1 新井正明	住友生命保険名誉会長	1991	28	78	群馬・市街	東大法	本家茶商手伝い→借金代わりで資産損失	戸長(村長)の娘
B5	1913	大正2 松沢卓二	富士銀行相談役	1994	31	81	東京・市街	東大法	弁護士	父が裁判官
B6	1913	大正2 高橋政知	オリエントランド相談役	1999	35	85	福島・市街	東大法	東大→内務省一審保局長→5県の知事歴任	不明
B7	1914	大正3 上山善紀	近畿日本鉄道相談役	1999	35	85	新潟→大阪・市街	京大法	東大→寺を継ぐのを嫌って大阪市職員に	新潟の寺の出身
B8	1915	大正4 岩村英郎	川崎製鉄会長	1988	25	72	大阪・市街	東大工	銀行員、株もやる	油問屋の娘
B9	1915	大正4 八尋俊邦	三井物産会長	1989	27	74	東京・市街	東京商大	日本製粉勤務(複数の財界人と懇意)	開業医の娘
B10	1915	大正4 吉野俊彦	山一証券経済研究所特別顧問	1992	29	77	東京・市街	東大法	東大卒、夏目漱石に英語を習う→政府役人	衆議院議員の娘、府立第一女学校卒
B11	1916	大正5 澄田智	前日本銀行総裁	1993	30	77	群馬	東大法	陸軍少将、フランス陸軍大学に留学、フランス駐在武官	キリスト教信者
B12	1917	大正6 柏木雄介	東京銀行会長	1986	24	68	大連	東大法	東大法→銀行上級管理職	森商の出身
B13	1916	大正5 谷村裕	元東京証券取引所理事	1990	27	73	東京	東大法	会社勤め(暮らしぶり不明)	(2歳になる前に死去)
B14	1917	大正6 竹見淳一	日本ガイシ相談役	1994	30	76-77	東京・市街	慶大法	銀行員、9歳のとき世界	商家の娘、実家は相当大きな構え
B15	1917	大正6 宇野取	東洋紡相談役	1994	31	77	京都・市街	東大法	銀行員、10歳のとき世界	(2歳のとき世界)
B16	1917	大正6 渡辺丈夫	東京海上火災保険相談役	1998	34	81	東京・市街	東大経	東大教授	北里柴三郎の長女
B17	1917	大正6 松原治	紀伊國屋書店会長兼CEO	2004	38	87	千葉→ソウル→大阪	東大法	職業軍人→退役後アルミ会社経営→病死	ほとんど盲及なし
B18	1919	大正8 高木文雄	横浜みなとみらい21社長	1994	30	74	東京	東大法	東京の商家出身→三井物産勤務	大阪の商家出身、東京への進学希望が果たせず大阪の学校へ
B19	1919	大正8 角丸良彦	総合エネルギー調査会会長	1996	32	76	越後高田	東大法	陸軍士官学校→陸軍中將	信州、今井邦子の妹
B20	1919	大正8 佐藤正一	東芝相談役	1998	34	79	東京・大森	東大工	東大途中で神学大学へ→牧師	牧師の長女、津田英学塾卒
B21	1920	大正9 館島夫	三菱自動車工業相談役	1995	32	75	東京・市街	東大法	東大卒→日本炭酸専務	東京女学館卒
B22	1922	大正11 齋藤晋六	三菱商會会長	1996	32	74	東京・市街	上智大	漢学者	不明
B23	1923	大正12 水野健	三菱マテリアル相談役	1998	33	74-75	東京・飛鳥山	東大第二工	裁判官の息子 会社役員→衆議院議員→運輸相	弁護士の娘
B24	1923	大正12 江頭匡一	ロイヤル創業者取締役	1999	35	76	福岡・城島	明大専門部(中退)	東大卒→三菱幹部社員	造り酒屋の一人娘
B25	1923	大正12 後藤康男	安田火災海上保険名誉会長	2002	37	78	愛媛・松山	法大経	会社顧問、中流サラリーマン家庭	不明
B26	1924	大正13 堀場雅夫	堀場製作所会長	1992	29	67	京都・市街	京大理	京大教授	実家は質屋、その後父は日銀京都支店へ
B27	1924	大正13 稲葉興作	日本商工会議所会頭	1995	31	70	シンガポール	東工大	三井物産商社マン	伯父が三井物産社長
B28	1924	大正13 長谷川薫	レングー社長	1998	34	74	名古屋・市街	学習院大	小学校教師→聯合紙器に常務、兄は社長	武士の家系、鉄道技師の長女
B29	1925	大正14 永山武臣	松竹会長	1995	31	69	東京・市街	京大経	軍人、男爵家を継ぎ貴族院議員に	女学校に行きたくても行けず、子どものためにと勉強していた
B30	1925	大正14 山本卓真	富士通名誉会長	1999	34	73	熊本市	東大第二工	陸軍士官学校→軍人研修生としてドイツ留学	没落士族の末裔
B31	1925	大正14 石川六郎	鹿島名誉会長	2002	37	76	東京・郊外	東大第二工	東大助教授→化学会社専務、初代経団連会長、貴族院議員	不明
B32	1926	大正15 賀来龍三郎	キャンノン会長	1993	29	66	愛知→別府→中国	九大経	大陵商人	不明

出生順位 [きょうだい構成]	地位達成戦略 [一結果]	進路形成				知育			その他			教育・地位達成に関する特記事項
		進学 指図	職業 指図	職業 教育	学歴 伝達	文化 伝達	外部資 源利用	徳育	体育	世話		
四男【7人女5人】	一般的地位達成	母	—	父	父	—	—	—	—	—	—	父は、漢文の書籍を読む順序を指図。大蔵殿と引きあわせる。母は、文学部進学に反対。
長男【第2人妹1人】	一般的地位達成	父・母	父	—	母	—	—	父・母	—	—	—	両親とも配慮の行き届いた教育。
二男【三男三女】	一般的地位達成	母	—	父	—	—	—	—	—	—	—	中学受験で父がつきつきで数学を教える。母は、文学部進学に反対。
二男【7人のうち、兄・姉夭折】	一般的地位達成	養父	—	—	—	—	—	—	母	—	—	小6で養子に。養母が立身出世の唄を吹き込む。養父による学歴、節の勧め。職業は自由。
長男【第1女3】	特定地位達成(法律家) [→他職]	父	—	—	父	—	—	—	—	—	—	終じて進学にはおろか。子どもの数が多く構っていられたかった。
二男【兄1姉2(先妻の子)弟1妹1】	一般的地位達成	父	—	—	—	—	—	父	—	—	—	兄と姉2人は先妻の子ども。具体的教育の記述なし。
長男【妹1人】	一般的地位達成	父	父	—	父	—	—	父	—	—	—	夏には家族で休暇を楽しむ。学校の成績が悪くても、心配はされたり叱られず、勉強に打ち込むようにと言われただけ。
二男【兄夭折、弟2人、妹1人】	不明	—	父	—	父	—	—	父	—	—	—	具体的記述なし。
長男【姉1、6人きょうだい】	特定地位達成(→達成)	父	—	—	—	—	—	母	—	—	—	父は、子煩悩。医者志望の彼を三井物産に入れたかった。母は長幼の序をたたき込み、彼を長男としてたてていた。
長男【第3人】	一般的地位達成	父	—	—	—	—	—	—	—	—	—	母が文学好き。母は、女子高等師範に行って国語教師になりたかったが親代わりで反対された。
長男【第2妹1】	一般的地位達成	—	—	—	—	—	—	母	—	—	—	父はリベラルで職業軍人になれとは言わなかった。母は教会の日曜学校に通わせる。彼には特に甘い。親に非川龍之介全集を買ってもらった。母方の祖母や祖父が溺愛。
二男【兄1、弟(夭折)1】	一般的地位達成	父	—	—	母	—	—	—	—	—	—	婿国子女。典型的な性別別業。父の忠告は命令も同然。教育熱心な母。
長男【妹1人】	不明	—	—	—	—	—	—	祖母	—	—	—	妻に先立たれ傷心の父は、彼を祖父に託し、幼稚園前に再び引き取る。
長男【姉2弟1妹2】	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	父は、苦勞の日々だったため、彼を銀行員にさせたくないと願う。母は株式投資で子どもも金銭を卒業させた。
3人きょうだい	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	父方の祖父が資産家で、父の死後も、継母との暮らしで困ることなし。継母の深い愛情。
長男【弟1妹4】	一般的地位達成	父・母	—	—	—	—	—	父・母	—	—	—	父はリベラルで、勉強しろと言われたことがない。一高を受験させたがり、後人になるなといった。教育はすべて母の役割。中学は母が指導。高等教育は父が指図。
戸籍上長男【兄夭折、弟1妹1】	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	父の職死により、学者の道を諦める。
長男【一人っ子】	一般的地位達成	父	—	—	父・母	母	—	母	—	—	—	両親は教育ババ、ママだが、融通性に熱を上げる風潮はなかった。家庭教師、予備校利用。
長男【妹1】	不明	—	伯父	—	—	母	—	—	—	—	—	母が短歌を読み、オルガンを弾く。家庭に西洋の文化。
長男【姉2弟2妹1、3人は夭折】	一般的地位達成	—	—	—	父	—	父	父	—	—	—	母はリベラル。家庭には、蓄音機、ラジオ、学習雑誌、マンガなどが豊富。
末子【4男1女】	一般的地位達成	—	父	—	母	—	—	—	—	—	—	父は教育ババ、教育的配慮が行き届いた家庭でのびのび育つ。子どもも部屋、団らんの茶、夏は避暑生活、遊びの架構に気を遣う親。
三男【5人の4番目】	一般的地位達成	—	父	—	—	父	—	—	—	—	—	子どもの自主性を重んじる。近所の文化人による感化。家庭教師による教育。
二男【兄1姉2弟1妹1】	不明	—	—	—	—	父・母	父	母	—	—	—	進路形成については具体的記述なし。日々の教育は母が担っていた様子。
長男【姉2弟1妹1】	一般的地位達成	父	—	—	母	—	—	—	—	—	—	父からの期待に反抗。父は自分と同じ進路に進ませたく「早稲は私学で大学ではない」「パイロットになるにせよ大学で視野を広げろ」。母の料理を手伝ったことが後の仕事に影響。
四男【嫡男扱い、7人のうち長男男親、次三男早世】	放任主義(進路は自分で決めてきた)	—	—	—	—	—	—	父	—	—	—	父は、しつけはしたが、細かい干渉はせず。一緒に遊んだり叱られたりの記憶はほとんどなし。安田火災に入り義児を師と仰ぐ。
長男【弟1】	一般的地位達成	父	—	—	母	父	父	父・母	—	—	—	両親とも教育熱心。教育環境を重視し、転居を繰り返す。父の教育方針は、幼少期のびび、中学以降厳格。
二男【兄1妹1】	一般的地位達成	父	—	—	母	—	—	—	—	—	—	家族は自中を行ったり来たり。学校を転々としたため、母が勉強を教えてくれた。
二男【7人きょうだい】	不明(一伯父の地位を継承)	—	父	父	—	母	—	母	—	—	—	父は教育熱心、勉強させる。文学や歴史の全集を買ひ与える。母はしつけに厳しい。別荘で夏は静養。
末子【4男6女】	特定地位達成(軍人) [→他職]	—	父	—	母	—	父・母	—	—	—	—	父は武人になることを望む。父は13歳のとき死去。母は、女学校に行かなかったため、子どものために勉強していた。
二男【5人きょうだい】	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	父は合理主義者で勉強しろと言ったことがない。家事や子どもの世話は母任せ。小6から終戦まで父と暮らしていない。
六男【9人きょうだい(兄2人夭折)】	一般的地位達成	母・父	—	—	父・母	—	父	父	—	母	—	幼少期の教育やしつけは母。中学以降、父による働きかけや影響が強くなる。中学進学は母、高校は父が決める。家庭内で長幼の序厳格。
末子【男3人】	一般的地位達成	—	父	—	—	—	父	—	父	—	母	子どもの世話をすべて愛情を注ぐ母。父は「子供は両親の下で教育すべき」「幼少期から知識の詰め込みくない」とリベラルな考えを持ちながら、子どもに対して節のように対峙。

各担い手への言及件数と全事例数に対するその割合を階層別に示したのが表3-1である。これを見ると、1事例あたりの平均言及カテゴリー数は、〔旧中間層〕2.43に対して〔新中間層〕2.25と、両者でほとんど違いはない。父親が担い手として言及された1事例あたり言及カテゴリー数についても、〔旧中間層〕1.68に対して〔新中間層〕1.44とほとんど変わらない。母親が担い手として言及された1事例あたりのカテゴリー数は、〔旧中間層〕0.64に対して〔新中間層〕0.97であり、〔新中間層〕でやや母親の関与の度合いが高い。両階層とも母に比べて父の方が関与の度の度合いが高いが、その傾向は〔旧中間層〕でより顕著である。

表3-1 家庭教育に関する担い手別の言及件数とその割合

	父親	母親	その他 (祖父母, 兄など)	言及数合計	全事例数
〔旧中間層〕	47 (1.68)	18 (0.64)	9 (0.32)	68 (2.43)	28
〔新中間層〕	46 (1.44)	31 (0.97)	4 (0.13)	72 (2.25)	32

※数値は、のべ件数（1事例平均件数）
 「言及数合計」では、同カテゴリー2人以上の言及は1とカウント

(2) 《進路形成》

表3-2は、表2-1と表2-2の情報を集約し、《進路形成》の下位カテゴリー〈進学指南〉〈職業指南〉〈職業教育〉のそれぞれに言及があった事例数と、いずれかのカテゴリーに1度でも言及があった事例数の割合（《進路形成》全体）を階層別に示したものである。

表3-2 《進路形成》への言及があった事例数とその割合

	〈進学指南〉	〈職業指南〉	〈職業教育〉	《進路形成》全体	全事例数
〔旧中間層〕	13 (46.4%)	16 (57.1%)	7 (25.0%)	23 (82.1%)	28
〔新中間層〕	16 (50.0%)	9 (28.1%)	0 (0.0%)	23 (71.9%)	32

※「進路形成全体」では下位カテゴリー2種類以上への言及も1とカウント

全事例数に対する《進路形成》全体への言及割合を見ると、〔旧中間層〕82.1%に対して〔新中間層〕71.9%で、それほど大きな違いはない。

下位カテゴリー別に見ると、〈進学指南〉に言及があった事例の割合は、〔旧中間層〕46.4%に対して〔新中間層〕50.0%であり、ほとんど違いはない。しかし、〈職業指南〉では、〔旧中間層〕57.1%に対して〔新中間層〕28.1%と、〔旧中間層〕でかなり割合が高くなっている。〈職業教育〉への言及については、全7件が〔旧中間層〕の事例であり、〔新中間層〕では皆無となっている。

さらに、表2-1と表2-2で下位カテゴリーごとに担い手への言及件数を両階層間で比較すると次の通りとなる。〈進学指南〉に関しては、〔旧中間層〕で父11件、母3件、その他2件に対して、〔新中間層〕では父12件、母5件、その他3件で、いずれの階層においても母への言及に比べて父への言及が圧倒的に多くなっている。〈職業指南〉に関しては、〔旧中間層〕で父13件、母2件、その他1件に対して、〔新中間層〕では父8件、母0件、その他が1件で、やはりいずれの階層においてもその担い手として言及されているのはほとんど父である。〈職業教育〉については、言及のあった〔旧中間層〕での7件いずれも父への言及である。

このように、《進路形成》は、いずれの階層においても父が主導していた傾向が強い。特に〔旧中間層〕では、〔新中間層〕に劣らず〈進学指南〉も行いながら、父が〈職業指南〉や〈職業教育〉を行っていた様子が見えがえる。〔旧中間層〕が、子どもに引き継ぐことのできる職業的家産を有していることを考えれば、彼らの間でそうした傾向が強いことにはうなずける。

(3) 《知育》

表3-3は、表2-1と表2-2の情報を集約し、《知育》の下位カテゴリー〈学識伝達〉〈文化伝達〉〈外部資源利用〉のそれぞれに言及があった事例数と、いずれかのカテゴリーに1度でも言及があった事例数の割合（《知育》全体）を階層別に示したものである。

表3-3 《知育》への言及があった事例数とその割合

	〈学識伝達〉	〈文化伝達〉	〈外部資源利用〉	《知育》全体	全事例数
〔旧中間層〕	3 (10.7%)	6 (21.4%)	2 (7.1%)	10 (35.7%)	28
〔新中間層〕	7 (21.9%)	13 (40.6%)	6 (18.8%)	22 (68.6%)	32

※「知育全体」では下位カテゴリー2種類以上への言及も1とカウント

全事例に対する《知育》全体への言及割合を見ると、〔旧中間層〕35.7%に対して〔新中間層〕68.6%と、〔新中間層〕で割合が高くなっている。

下位カテゴリーのそれぞれに言及があった事例の割合を見ると、〈学識伝達〉では〔旧中間層〕10.7%に対して〔新中間層〕21.9%、〈文化伝達〉では〔旧中間層〕21.4%に対して〔新中間層〕40.6%、〈外部資源利用〉では〔旧中間層〕7.1%に対して〔新中間層〕18.8%と、いずれも〔新中間層〕で多くなっている。

表2-1と表2-2で下位カテゴリーごとに担い手への言及件数を両階層間で比較すると次の通りとなる。〈学識伝達〉に関しては、〔旧中間層〕で父1件、母0件、その他2件に対して、〔新中間層〕では父3件、母4件、その他0件である。〈文化伝達〉に関しては、〔旧中間層〕で父5件、母1件、その他1件に対して、〔新中間層〕では父8件、母5件、その他1件で、いずれの階層においてもどちらかといえば父への言及が多い。〈外部資源利用〉に関しては、〔旧中間層〕で母2件のみに対して、〔新中間層〕では父5件、母4件である。

いずれの下位カテゴリーにおいても、言及数自体がそれほど多くないため、傾向の違いの把握においては慎重になる必要があるが、《知育》に相当する親の家庭教育実践は、〔旧中間層〕に比べて〔新中間層〕で多く、特に〔新中間層〕では母も父に劣らず《知育》に直接的に関与していた様子がうかがえる。

(4) 《その他》

表3-4は、表2-1と表2-2の情報を集約し、下位カテゴリー〈徳育〉〈体育〉〈世話〉のそれぞれに言及があった事例数と、いずれかのカテゴリーに1度でも言及があった事例数の割合(《その他》全体)を階層別に示したものである。

表3-4 《その他》への言及があった事例数とその割合

	〈徳育〉	〈体育〉	〈世話〉	《その他》全体	全事例数
〔旧中間層〕	14 (50.0%)	1 (0.36%)	6 (21.4%)	18 (64.3%)	28
〔新中間層〕	16 (50.0%)	0 (0.0%)	5 (15.6%)	16 (50.0%)	32

※「その他全体」では下位カテゴリー2種類以上への言及も1とカウント

〈徳育〉に言及のあった事例の割合は、〔旧中間層〕も〔新中間層〕もちょうど50.0%で両者に違いはない。〈体育〉については、〔旧中間層〕で1件言及があっただけである。〈世話〉については、〔旧中間層〕21.4%に対して〔新中間層〕15.6%とそれほど違いはない。

表2-1と表2-2で下位カテゴリーごとに担い手への言及件数を階層別に見ると次の通りとなる。〈徳育〉に関しては、〔旧中間層〕で父7件、母8件、その他4件に対して、〔新中間層〕では、父10件、母7件、その他2件であり、いずれの階層においても、父か母のいずれかに大きく偏っているわけではない。〈体育〉で唯一言及があったのは父に対してである。〈世話〉については、〔旧中間層〕で父と兄への言及が1件ずつあったが、残りの4件はすべて母であり、〔新中間層〕での〈世話〉への言及は5件すべてが母であった。

以上から階層間の傾向の違いをまとめると、次のように言える。〔旧中間層〕では、〔新中間層〕に比べて〈職業教育〉〈職業指南〉に関する記述が多く、母による教育への言及は〈徳育〉と〈世話〉を除けばきわめて少ない。それに対して〔新中間層〕では、〔旧中間層〕に比べて〈進学指南〉〈文化伝達〉への言及が相対的に多く、母が〈進学指南〉や〈学識伝達〉にもある程度関与している傾向が見られる。

4. 地位達成戦略

(1) 地位達成戦略タイプの階層間比較

つぎに、家庭教育に関する具体的記述からうかがえる、子どもの地位達成戦略を両階層間で比較してみよう。表2-1と表2-2の「地位達成戦略」の欄には、

〔旧中間層〕と〔新中間層〕のそれぞれについて、各対象者の家族で採用されていたと判断される地位達成戦略のタイプを記している。表4-1は、各地位達成戦略タイプに相当する事例数をカウントして階層別に示したものである。

表4-1 子どもの地位達成戦略タイプの分布

タイプ名	定義	〔旧中間層〕	〔新中間層〕
① 特定地位継承	父親の職業的地位をそのまま継承させようとする	11	0
② 特定地位提供	父親の職業的地位を継承させる意図はないが、家業に迎え入れようとする	3	0
③ 特定地位達成	直接継承できない父親の職業的地位に就かせるために学歴・資格取得を促す	0	3
④ 一般的地位達成	父親の職業的地位を継承させることにこだわらず、学歴・資格取得を通じた地位達成を促す	5	19
⑤ その他	「放任主義」や具体的記述のないもの	9	10
合計事例数		28	32

〔旧中間層〕では、28事例中、「①特定地位継承」が11件と最も多く、続いて事例数の多い順に、「⑤その他」9件、「④一般的地位達成」5件、「②特定地位提供」3件となっている。「③特定地位達成」に相当する事例は見られない。いずれのタイプの戦略がとられていたかにかかわらず、最終的に父の地位を継いでいたのは28事例中10件である。

〔新中間層〕では、32事例中、「①一般的地位達成」が最も多く19件、続いて事例数の多い順に、「⑤その他」10件、「③特定地位達成」3件となっている。「①特定地位継承」と「②特定地位提供」に相当する事例は見られないが、子どもに直接引き継ぐことができる職業的家産を持たない家庭の出身者という本稿の〔新中間層〕の定義からすれば当然の結果であろう。

このように、〔旧中間層〕と〔新中間層〕の定義自体に、地位達成戦略タイプの選択の幅を左右する要素が含まれてはいるものの、両階層で採用された地位達成戦略は大きく異なっている傾向が見られる。そこで次に、それぞれの階層における、各地位達成戦略タイプの具体例を確認してみよう（以下、括弧内のA/Bと数字は、表2-1、表2-2における事例番号に対応している）。

(2) 〔旧中間層〕の地位達成戦略

〔旧中間層〕の28事例中少なくとも11件において「①特定地位継承」戦略が採られていたと判断されるが、それらのうち6件は、著者自身が長男である(A3, A28)か、戸籍上の長男ではないが兄が夭折して事実上長男として扱われ(A1, A4, A5, A20)、父の後継者として育てられた事例である。

たとえば、豊田英二(A4)の場合、幼少期から父の紡織工場が遊び場になっており、休暇や父の出張の際に国内外のあちこちに連れていかれたり、高校の夏休みには父の工場で実習をさせられたりするなど、父によって彼を「跡取り」にするための入念な教育が行われていた。結果的に、大学の卒業研究でディーゼルエンジンの設計に取り組んだ英二は、従兄でトヨタ自動車の創業者である豊田喜一郎の勧めで、父の工場ではなく豊田自動織機の自動車部に配属されている。

名実ともに長男ではないが、男兄弟のなかで父から跡継ぎ候補と目されて「①特定地位継承」戦略のもとで育てられた事例もある。横河正三(A8)は、三男だったが、幼少の頃から何かにつけて、横河グループの創始者である父から兄らとは違う指導を受けており、彼に後を継がせようとする父の誘導を感じていたという。

「①特定地位継承」戦略が採られているその他の事例は、きょうだいに関する具体的記述がないものや、兄がいたものの夭折したかどうか不明であるもの(A10, A11, A17, A18)などである。

次に、「跡取り」としてではないが息子を家業に迎え入れようとする「②特定地位提供」戦略に相当する例が3件見られた。9人きょうだいの7番目で五男の石橋信夫(A19)は、家業の林業に就くことを当然のものとして育てられており、「理屈は学校で、実地は家業で」が口癖の父から、家の仕事を山のようにさせられたと述べている。父ではないが、伊藤雅俊(A27)の場合、母と離婚して家を出た父に代わって自分を育ててくれた13歳年上の異父兄が、自分が営む家業に雅俊を迎え入れることを見据えて彼に商業専門学校への進学を勧め、学費や下宿代を賄ってくれている。

社会的地位再生産の観点からすれば「戦略」と呼ぶにはふさわしくない素朴で消極的な方針ではあるが、13人きょうだいの7番目で五男であった石井久(A24)の父は、小農で生活が苦しかったにもかかわらず、「農業は立派な職業だから」として久の進学を認めず、彼を家業の農業に就かせている。小学校を卒業するときには、校長や村長までが学業に秀でていた久に進学を勧め、担任教員が月謝のかからない師範学校を紹介したり、兄が軍隊の仲間と協力して上級学校に行かせようとしたりしても、結局父は一切応じなかったという。

「④一般的地位達成」に相当する5件のうち、鈴木治雄(A6)については、8男1女、9人きょうだいの五男であり、「味の素」の経営に従事していた父からは、常々「商売人になれ」と言われてはいたものの、特に将来の職業について具体的な指示を受けた記述は見られない。その他の4件(A14, A15, A16, A23)は、いずれも、貧困や没落や商売の失敗により、家業を継げなかったり、継げても生活が苦しいことが目に見えていたりしていたため、学歴の取得を通じて子どもを他職に就かせようとしたものである。

「⑤その他」に分類された事例には、親が幼少期に死去していた事例(A2, A7)や、商売が忙しくて「息子の学業にはむとんちゃく」(A12)、「父母の教育方針は放任主義だった」(A26)などと記述されているだけのものや、地位達成戦略に関する記述がほとんどなくそのタイプを判断するのが困難なもの(A9, A13, A21, A22, A25)などが含まれている。

(3) [新中間層]の地位達成戦略

[新中間層] 32事例のうち3分の2に近い少なくとも19件で、「④一般的地位達成」戦略が採られていたと判断される。これらの多くは、特に将来息子が就く職業を指定してはいないが、親は総じて学歴取得とそのための家庭教育に熱心であり、息子の将来の地位達成に利することを考え、折に触れて〈進学指南〉〈学識伝達〉〈文化伝達〉〈外部資源利用〉などを行っている事例である。このタイプに該当する具体例については、次節でそのいくつかを取り上げるので、本項では以下に他のタイプの具体例を示しておく。

「③特定地位達成」に該当するものは3件のみであった。父が弁護士で母は裁判官の娘という法律家の家庭に生まれた松沢卓二(B5)は、東大を受験する際に経済学部を受験したかったが、それまでほとんど彼の進学に口を出さなかったものの、彼を公証人にさせたかったと思われる父から法学部の受験を命じられ、それに従っている。八尋俊邦(B9)の場合、本人は医者になりたかったが、日本製粉の役員をしていた父はその親会社だった三井物産に俊邦を入れたがっていた。結局医学部の受験を二度失敗して医者になることを諦めた俊邦は、父の意向に沿って東京商科大学に進み、卒業後に三井物産に入社している。永山武臣(B29)の場合、父は日清戦争に従軍し男爵家を継いで貴族院議員になった人物であり、武臣が軍人になることを期待していたが、武臣が初等科6年生のときに亡くなっている。その後、母を喜ばせるために小遣いを貯めて母と歌舞伎を一緒に見に行ったことがきっかけで、彼は軍人への道に進まず歌舞伎の世界に入るようになった。

なお、「④一般的地位達成」や「⑤その他」に分類された事例の中には、「③特定地位達成」とは逆に、父親が息子には自分と同じ職業に就かせたくないと言ったり、あえてそれに就くようには言わなかったというものも見られる。澄田智(B11)の場合、陸軍少将だった父は、フランスに留学し再び武官としてそこに駐在する間にヨーロッパのリベラルな思想を身に付けており、息子には決して職業軍人になれとは言わなかったという。竹見淳一(B14)の場合、彼が9歳のときに他界した父は銀行員だったが、苦労の日々であり、息子を銀行員にさせたくないと漏らしていたという。

父が、自分の職業以外の特定の職業に息子を就かせまいとしていた事例も見られる。渡辺文夫(B16)の父は、東大法学部を首席で卒業した後、大蔵省の内定を辞退して大学に残り、留学した後に東大経済学部の教授になった人物である。父は、文夫が大学の学部を選ぶ際に「役人にはなるな」と伝えており、文夫は法学部ではなく東大経済学部に進んでいる。

「⑤その他」に分類された事例には、親は放任主義で進路は自分で決めてきたというもの(B25)、「進学指南」や「職業指南」に関する具体的記述が全く

ないため判断が困難なもの (B8, B17, B19, B23), 結果的に父の縁故を利用して就職をした記述はあるが教育に関する具体的記述は見られないもの (B8), 幼少の頃に父が死亡したり (B14, B15, B17), よその家に引き取られたりしたもの (B13) などが含まれている。

5. 教育戦略

(1) 学歴の階層間比較

前節で示した地位達成戦略において重要な位置を占めているのが, 学校教育と学歴の取得である。そこでまず, [旧中間層] と [新中間層] とで最終学歴を比較してみよう。表2-1と表2-2の「最終学歴」の欄について両階層を比較してみると, [旧中間層] の学歴水準は, [新中間層] のそれに比べると低い傾向にあることがわかる。[旧中間層] の最終学校歴は, 官立大学, 私立大学, 実業学校, 前期中等教育, 初等教育など, バリエティに富んでいる。大学の出身学部を見ると, 帝国大学卒に限っても, 10人中半数以上の6人が経済学部卒であり, 法学部卒は1人しかいない。帝国大学以外の学歴保持者についても, 商業系や工業系の学部や実業学校の出身者が多くなっている。

一方, [新中間層] では, [旧中間層] に比べて圧倒的に高学歴, 高学校歴の傾向が見られる。32事例中, 31件が大学卒で, 27件が官立大学卒, 19件が東大卒である。学部については, 官立大学卒27件のうち, 半数以上の17件で法学部を卒業しており, 以下多い順に, 工学部6件, 経済学部3件, 理学部1件, 商科1件となっている。文学部卒は1人も見当たらない。

では, こうした彼らの学歴は, 親のどのような教育意識のもとで形成されてきたのだろうか。階層による, 垂直レベルと水平レベルの両方における最終学歴傾向の違いは, 何に起因しているのだろうか。

かつて天野郁夫 (1983) は, 学校教育と学歴の果たす機能を「地位表示機能」と「地位形成機能」という2つの側面からとらえる視点を提唱した。「地位表示機能」の側面においては, 学歴は「人々の帰属している地位の指標」であり, 学校教育は, 「人々に, その地位にみあった文化や教養を伝達することによって,

社会の階層構造を再生産する役割」を果たし, 「消費」としての性格を強く持つ。「地位形成機能」の側面においては, 学歴は「人々が学校で身に付けた一定のレベルとタイプの知識・機能の指標」であり, 学校教育は「社会的な上昇移動や地位達成の手段としての役割」を果たし, 「投資」としての性格を強く持つ。そのうえで天野は, それまでの学歴論は「地位形成機能」に着目して東大を頂点とする「官学」での教育を通した立身出世の側面をクローズアップしてきたが, 教育の「地位表示機能」に着目すれば, 「富農・富商, 豪農・豪商, 地方名望家層」などの「旧中産階級」が学校教育に求めていたものや, 私学も含めた学歴社会の成立過程の理解が深まりうることを指摘した。

以下では, この天野による教育の社会的機能の2類型を手掛かりに, 最終学歴傾向の違いを生じさせた [旧中間層] と [新中間層] の教育戦略の内実を検討してみよう。

(2) [旧中間層] の教育戦略

本稿における [旧中間層] とは, 子どもが直接引き継ぐことができる職業的家産を有する家族のことであるから, この層では, 子どもに家業を継がせるのであれば, 必ずしも学校教育を通した「地位形成」を必要とはしない。では, [旧中間層], とりわけその典型的な階層再生産戦略である「①特定地位継承」戦略を採っていた家族では, 学校教育に「地位形成機能」よりも「地位表示機能」を求めていたのだろうか。

実際に, 父が資産家であったり多くの従業員を雇用する事業主であったりした事例の中には, そのように理解できる事例もいくつか見られる。例えば, 父が「梁瀬自動車」の初代社長だった梁瀬次郎 (A11) の場合, 小学校1年の3学期に慶應義塾幼稚舎に特別編入してから大学の本科を卒業するまで慶応に通っているが, 親からの〈進学指南〉や〈学識伝達〉については全く記述がない。彼は, 大学卒業後には, 三井物産に内定を得るも父の命によって申込みが却下され, 梁瀬自動車の芝浦工場に勤務させられている。

父が「大和運輸」(ヤマト運輸の前身) 初代社長であった小倉昌男 (A25)

の場合も、教育熱心だったという母が、彼が小学校4年生のころから家庭教師を招き、彼を中高一貫の東京高等学校尋常科に進ませているが、親による〈進学指南〉や〈学識伝達〉については全く触れられておらず、彼は東大経済学部卒業後しばらくして父親の会社に入っている。

彼らの事例においては、学歴は、将来の地位を形成する手段というよりも、どちらかといえば将来獲得することがほぼ約束されている地位にふさわしい指標として機能していると考えられる。

しかし他方で、父の事業を継ぐことがほぼ約束されていたにもかかわらず、学校教育に「地位表示」以上の機能を求めていたと思われる事例もある。幼い頃からいずれば父が創業した「美津濃」を継ぐものとして育てられていた水野健次郎(A5)は、甲南高校で四年間の尋常科を終えて高等科に進級する際、化学や物理学に関心があって理科に進みたいと父に頼んだが、会社の経営に有用な法学か経済学を学ばせようと考えていた父は、それを聞き入れず、そのときは文科に志望届を出させている。ところが、その後海外に赴いて「ヨーロッパの技術が想像以上に進んでいる」ことを知り、「これからは運動用品を作るにも、化学知識を身につけておくことが大切だ、と痛感し」た父は、進路変更期間を過ぎていたにもかかわらずドイツから健次郎宛に「リカヘカワレ」との電報を打ち、甲南の理事にまで働きかけて健次郎を理科に変更させている。

竹田弘太郎(A10)の場合も、父は彼に家業の銀行を継がせるつもりで、小学校、中学校、高等学校の進学先を指定し、その後も高等工業か高等学校の理科に行こうと考えていた本人の意向に反して、彼を早稲田大学商学部に進ませている。

確かに、これらの事例では、学校教育を「地位形成」の手段としてとらえているわけではないが、決してそれを単なる「地位表示」の手段としてのみとらえているわけでもない。息子が父の事業をよりスムーズに継承し、その後も事業を円滑に運営してさらに発展させるのに有用な知識や技能を学ばせようとしているという点では、彼らにとって学校教育は、単なる「消費」ではなく、少なくとも「投資」としての側面を強く持ち合わせていると言えるだろう。

上記は、〔旧中間層〕の中でも、父が大規模な事業を成功させて金銭的にも余裕のある、どちらかといえば資本家層ともいべき社会経済的階層が高い家族の事例である。これらの層では、たとえ学校教育が「投資」としての側面を持つにせよ、それは社会的上昇移動の手段というよりも、親の階層的地位を再生産するための手段といえる。しかし、家業の事業規模がそれほど大きくなく、生活も決して裕福ではない層の事例では、学校教育、とりわけ中等レベル以上の教育に、親の階層的地位の再生産手段というよりも社会的上昇の手段としての機能を強く求めていたと思われる事例も見られる。

素野福次郎(A3)の場合、水道工事業を営んでいた父は、教育を受けておらず簿記などもできなかったため、家業を継がせることを考えていた息子に勉強させようと、福次郎を商業学校に行かせている。塚本幸一(A18)の場合も、家業の商売を立て直すため「迷わず商人の士官学校といわれた八幡商業に進学することにした」という。村田昭(A20)の場合も、両親とも自らが無学であるため子どもには十分な教育を受けさせたいと思い、彼に上級学校への進学を熱心に勧めて商業学校に進学させている。

これらの事例では、息子には父の職業的地位を継ぐことが期待されており、また実際にそうなっているが、学校教育には「地位表示機能」よりも明らかに「地位形成機能」が求められていたといえるだろう。

(3)〔新中間層〕の教育戦略

本稿における〔新中間層〕は、子どもに直接引き継ぐことができる職業的家産を持たない現業職以外の職、すなわち具体的にはホワイトカラー、職業軍人、官僚、専門職などに父親が就いている家族である。この層では、子どもは、父から直接職業的地位を継承することはできず、父と同じ職業や、それと同等の威信や収入が得られる職業に就くには、それ相応の水準と種類の学歴を自ら取得することが不可欠となる。したがって、学校教育と学歴には、自ずと「地位表示機能」よりも「地位形成機能」が求められることになる。

この点をふまえれば、結果的に経済界のエリートとなった〔新中間層〕出身

者たちが文学部を避け、その大半は法学部を中心とする実学系の学部に進んだことにもうなずける。〔新中間層〕出身者のなかには、文学部に入ることを考えていた者はいるが、いずれも親による説得や忠告によって、それを断念させられている。勝田龍夫 (B1) は、小説家になりたくて東大文科に進もうとしたが、母は「猛反対」し、義兄らにも働きかけて彼を京大法学部に入学させている。磯崎叡 (B3) も、東大法学部に入学後、演劇評論家になりたくて文学部に変更しようとしたが、母から「そんなことをしたらご飯を食べられないよ」と叱られて諦めている。吉野俊彦 (B10) は、高校卒業後に文学部に進みたいと考えて父に相談したところ、父は「お前がもし日本文化史研究の道を徹底的に貫き大学の教授にでもなれるという自信があるのなら、自分は反対しない」と言ってくれたが、「自信が持てず」法学部にしたと述べている。

ところで、先行研究においては、新中間層では、階層的地位再生産において学歴取得が不可欠の要件となるため、学校教育の補完としての家庭教育に熱心になるが、この層の父親たちは家庭から離れた職場で長時間働いていることから、家庭教育の主たる担い手は母であったとされてきた (沢山1990, 広田1999)。確かに、本研究の〔新中間層〕においても、こうした先行研究の主張を支持する事例は多く見られる。父は全くの放任主義で、母はそうした父の分まで子どもたちに愛情を注いだ (B32) とか「教育は全て母の役割」 (B16) などというように、子どもの身の回りの世話や日々の教育はほぼ母が担っていたことに言及している例は少なくない。

柏木雄介 (B12) の場合、銀行勤務の父は、一家で海外生活をしているときにも不在がちで雄介と接する機会はおくわずかであり、雄介が12歳のときには父をニューヨークに残して母と彼で帰国したため、子育てはもっぱら母の役割であった。母は、帰国子女であった雄介の教育に必死で、彼が入浴中に脱衣所で教育勅語を大きな声で読んで聴かせたり、習字の手本を書いてやってそれをなぞらせたりと献身的な教育をしており、雄介の高校卒業時には、父が母に「これまで雄介の教育をまかせきりにしてきたが、ご苦労様でした」と金一封を渡している。

しかし、そうした事例においても、多くの場合、父は子どもの教育に全く無関心だったわけではなく、子どものライフステージの要所で進路形成などに関与しており、中には、高校進学頃から次第に子どもへの関与の度合いを増して影響力を強めている事例も見られる。たとえば、柏木雄介の場合、進路はすべて父の意向に沿って選択させられており、父は、周りから一高への進学を薦められていた雄介を暁星学園から成城学園尋常科に転校させたり、高等科に進む際に医者にあこがれて「理乙 (ドイツ語)」に進もうとする雄介を「文甲 (英語)」へ進ませたりしている。

石川六郎 (B31) の場合、化学工場に勤務していた父は仕事が忙しく、子どもが幼いときのしつけや教育はすべて母に任せていたが、六郎は、中学になったころから、あまり接する機会がなかった父の「天才は別格だが、凡人でも天才の一手手前までは行ける。だから死ぬまで努力しろ」という口癖の影響を受けるようになっており、彼の成蹊高校への進学も父の勧めが決め手となっている。そして、高校生の頃からは毎晩のように父と話すようになり、アメリカ滞在経験があり化学工業の代表にもなっていた父から、太平洋戦争前のアメリカの様子や開戦後の戦況分析を聞かされている。

子どもがより年少のときから、父が「学識伝達」において直接重要な役割を果たしていた例も見られる。勝田龍夫 (B1) は、府立一中3年生のときに漢文の勉強を始め、朝鮮銀行総裁で後に文部大臣にもなった父の書棚から漢文の書籍を手当たり次第に持ち出したところ、父から「まず日本書紀、それから唐宋八家文へ進め」と言われ、「大学」や「易経」も学んだと記している。磯崎叡 (B3) の場合、府立四中の受験勉強の際には、軍人で造船技官だった父がつきっきりで数学などを教えている。長谷川薫 (B28) の場合、父が教育熱心であり、「有名な文学や歴史の全集もの」を買い与えて姉たちに読ませたり、彼を含めた7人の子ども全員を広い部屋に集めて、自分が囲碁を打っている横で勉強させたりしている。

沢山美果子 (1990) は、当時の新中間層の教育意識には、「教育、学歴をつけることで無知な状態から子どもを脱却させる」といういわば「学歴主義」と

「子供の純粹さや無垢という教育以前の状態」を良きものとみなす「童心主義」という矛盾する心性が併存していたことを指摘しているが、前段で述べた「学識伝達」や、進学先の学校を細かく指定するといった父親の関与の仕方は、この層の「学歴主義」的な心性を色濃く反映している。

それに対して、この層の「童心主義」的な心性を反映した家庭教育実践がうかがえる事例も見られる。渡辺文夫 (B16) は、「子どもの教育はすべて母にまかせられて」おり、父から一度も勉強しろとか何になれとか言われたことがなく、叱られた記憶もなかったと述べている。しかし、東大経済学部の初代教授に就任した彼の父はヨーロッパ留学で自由主義を身に付けた「信念の男」であったとの記述をふまれば、そうした父の態度は、放任というよりも、子どもの自主性を尊重したりベラルな教育思想に基づく確信的な教育的配慮であったとも考えられる。

賀来龍三郎 (B32) も、父は全くの放任主義で、母はそうした父の分まで子どもたちに愛情を注いだと述べているが、同時に、彼の父にも明確な教育方針があったことをうかがわせる記述もある。父が中国で働くことを決めて家族で上海に渡ろうとしていた直前に、龍三郎の兄が難関と言われた東京高校附属中学に合格したので、母は兄に日本に残って進学することを勧め、担任教師も兄を預かってやるとまで言った。ところが父は、「子供は両親の下で教育しなければダメだ」との考えから、兄を上海に連れていっている。また、「小さい頃から知識を詰め込むのは良くない」という父の方針のもと、龍三郎は、幼稚園に通うことなく家でも勉強せずに朝から晩まで遊んでいたが、相応の年齢になれば周りと同じように勉強が理解できるようになったと記している。

館豊夫 (B21) の場合も、「教育面では、父も母も細かい事は言わなかった」とのことだが、それは単なる放任主義というよりは、両親による当時のリベラルな教育的配慮に基づくものであったことが、次のような記述からうかがえる。

狭くても各人に部屋を与え、夜八時ごろには団らんのお茶の時間を設けた。夏には箱根、日光、茅ヶ崎などで小さな家を借りて避暑生活をと、学びと

遊びの環境作りに気を使ってくれた (32巻14頁)。

「大正デモクラシーの残照」の時代に新しい文化・風俗の東京の地で、伸び伸び幼少年期を過ごすことができ、また当時はまだ進学率が低かった中で大学教育を受けることもできた。親の恩を今も痛感している (32巻11-12頁)。

最後に、教育的配慮の最も行き届いた家庭教育の例の1つとして、子どもの発達段階に応じて教育方針の重心を切り替えていたと思われる堀場雅夫 (B26) の父の事例を挙げるができる。雅夫が生まれたとき、彼の家族は京都市内で彼の祖父母と一緒に暮らしていたが、雅夫が4歳のとき、理学博士で京大教授だった父は「子供は自然に恵まれた所で育てた方がいい」と考えて祖父母の家を離れて宇治山科へ引っ越し、雅夫は、父の意図通りに、引っ越した先で弟と野山を駆けまわる日々を過ごしている。しかし、雅夫が小学校に入る直前、彼を京都府師範学校付属小学校へ通わせるため、一家で再び京都市内へ引っ越し、雅夫を当時の先進的な文化にたつぷりと触れさせてのびのびと育てている。ところが、彼が中学生になると厳格なしつけに転じ、彼に質素な生活を強いている。たとえば、寮生活をしている雅夫のところまで訪ねてきた父が電車で自宅へ帰るのを見送る際、雅夫は、父が電車に乗ったのを見届けてすぐに帰ってしまったところ、目上の人は見えなくなるまで見送るものだ叱られたという。また、小学生のときの家族旅行では一等車に乗せてもらっていたのに、中学生になって父の出張に同行させてもらう場合は、父は二等車に乗り、雅夫は三等車に乗せられていたという。ここには、「学歴主義」を子どもの各発達段階を貫く教育方針の基軸としながらも、児童期までは「童心主義」的配慮に重点を置き、青年前期以降は「厳格主義」(広田1990)に重心を移してトータルに教育的要素のバランスを取ろうとする、非常に配慮の行き届いた教育戦略を見取ることができる。

6. 結論と考察

今回の分析は、結果的に経済界のエリートになった大正期生まれの男性という限られた対象者が著した自叙伝というサンプルを用いたものであるが、そこからは当時の家庭教育に関して、次のような傾向が明らかになった。

〔旧中間層〕では、主として「特定地位継承」戦略のもと、父親主導で〈職業指南〉と〈職業教育〉を中心とした家庭教育が行われる傾向が顕著に見られた。学歴については、垂直レベルでも水平レベルでも様々なものが見られた。学校教育は、大規模事業者層にとっては主として「地位表示」の手段でありながら「投資」としての性格も有しており、零細事業者層にとっては積極的な「投資」であり「地位形成」手段としての性格を強く持っていた。

〔新中間層〕では、主として「一般的地位達成」戦略のもと、父親主導の教育方針のもとにありながら、母親が日々配慮の行き届いた家庭教育を担う傾向が見られた。そこでは、主として学歴取得を最優先しながらも、子どもの純真さを尊重したりしつけに気を配ったりしながら、必ずしも職業に直結しない「文化伝達」も進んで行われる傾向が見られた。そして、結果的には東大法学部を中心とする官立大学への進路がとられており、学校教育は明らかに「地位形成」手段としての性格を強く持ち合わせていた。

このように、大筋において、教育的配慮を張りめぐらせた家庭生活の中で母親が日々の家庭教育を担うという「教育家族」の典型が、〔旧中間層〕よりも〔新中間層〕でより顕著に確認された。この点は、先行研究の定説を支持するものであった。

とはいえ、本研究からは、両階層とも、当時の教育戦略の主導者は、多くの場合母親ではなく父親であったと思われることも明らかになった。「父親不在」や「教育ママ」が問題とされてきた戦後の経済成長期のサラリーマン家族の典型的イメージと比較した場合、大正期から昭和初期にかけては、〔旧中間層〕はもちろん、〔新中間層〕においても、明らかに教育に対する父親の関心と関与の度合いが高い傾向が見られる。この点では、本研究は多賀（2014）の知見

をさらに強化するものでもある。

当時の父親たちの家庭教育への関心の高さは、何に由来するものなのだろうか。〔旧中間層〕に関しては、学校教育が普及・拡大した後も、「特定地位継承」戦略をとるにあたって、「家職の伝承」における教育資源が依然として圧倒的に父親に集中していたため、〈職業指南〉や〈職業教育〉を中心とする家庭教育を、母親ではなく事業主である父親が主導することはきわめて自然なことだったと思われる。また、〔旧中間層〕の一部では、学校教育や学歴に高い関心をもつ傾向が見られたが、学校教育や学歴が「地位継承」自体に必要なくても、継承しようとする地位の指標や「人的投資」として重要であれば、父親はそれらに無関心ではいられなかったのではないかと考えられる。

他方で、〔新中間層〕の父親の家庭教育への関心の高さの理由としては、少なくとも次の3つの側面が考えられる。第1に、戦前の「家」制度との関連である。旧民法のもとで法的に戸主として位置づけられていた当時の父親たちは、職業的家産を持たない新中間層であっても、家長として「家」を継承し発展させる責任を強く感じていたのではないだろうか。第2に、近代的孩子と親との関連である。他の社会集団に先駆けていち早く近代的な家族生活の様式を採り入れそれを体現したとされる新中間層の父親たちは、子どもを労働力や将来の跡継ぎとみなして育てるというよりも、純粹に子どもをかわいがりその成長を喜ぶという近代的なエトスを多かれ少なかれ身に付けており、それが彼らの家庭教育への関与を後押しした側面があったとも考えられる。第3に、教育戦略との関連である。当時の新中間層の父親たちは、西洋的近代学校教育制度を経験した第1・第2世代であり、特に当時の高等教育修了者は、全人口のわずか数パーセントを占める超エリートであった⁵⁾。そうした階層的地位を首尾よく再生産するには、周到な戦略が必要であり、母親の持つ教育資源だけでなく、当時ではきわめて希少であった父親たちのもつ教育資源も含めて、子どもの教育に父母双方の教育資源を総投入する必要があったのではないだろうか。

本稿に残された課題は多いが、ここでは特に次の2点を挙げておきたい。1つは、各階層、各教育戦略類型に典型的な事例について、「私の履歴書」以外

の資料にもあたりながら、詳細な検討を進めることである。特に、産業構造、階層構造、学校教育制度、教育思想などの点から、彼らにそうした戦略を採らせた社会的背景について詳しく検討するとともに、自叙伝では母による教育が「過少表示」されている可能性も視野にいれつつ、父母の家庭教育の役割分担が具体的にどのようなものだったのかをさらに吟味したい。

もう1つは、本稿で焦点を当てた時代の父親を写し鏡とした、戦後の父親の家庭教育の考察である。大正期から昭和初期の中間層の父親たちと比べて、戦後復興期から経済成長期にかけての中間層の父親たちは、本当に子どもの教育への関与が少なかったのか。そうであるならば、それはなぜなのか。また、2000年代以降の父親の家庭教育関与の気運（多賀2012）は、新しい流れと見なすべきか、あるいは大正期への先祖返りとみなされるべきか。これらの点について、産業構造や階層構造の変化に加えて、学歴構造や社会意識の変化といった観点からも検討したい。

注

- 1) 本稿の執筆に当たっては、まず、多賀（2014）で用いた自叙伝の集約方法と分析枠組みに従って主として山口が事例別記録を作成し、次に、その記録に基づいて共同で分析枠組みを設定して自叙伝の読み取りと解釈を行い、その後、その結果に基づいて主として多賀が本文の執筆を行い、最後に、共同で全体の調整を行った。
- 2) 「家庭教育」は、近代における公教育あるいは学校教育の成立に伴って、それらの対概念、あるいはそれらを補完するものとして生み出された近代的な概念（中内1987、小山1990、小山・太田2008）である。ただし、本文でも述べているように、今回分析した事例の中には、学校教育の「下請け」のレベルを超えて、子どもの地位達成のために家族成員によって積極的に行われる教育的営みも多く見られる。したがって本稿では、家族における子育てのうち、単に学校教育に従属するもののみならず、学校教育の不足を補いつつ子どもの地位達成のために積極的に行われる教育的営みも含めて広く「家庭教育」を呼ぶことにする。
- 3) 日本経済新聞の企画としての「私の履歴書」ならびにシリーズとしての「私の履歴書 経済人」の詳細については、多賀（2014）29-30、53頁を参照。
- 4) 1912年生まれの全員今回の対象に含めたため、対象者60名の中には、同年7月30日以前に生まれた明治期生まれ3名が含まれている。
- 5) 高等教育機関（大学、大学院）への進学率は、大正4（1915）年で同年齢人口の1.0%、大正14（1925）年でもわずか2.5%であった（文部省調査局1962）。

参考文献

- 天野郁夫 1983「学歴の地位形成機能と地位表示機能」『教育社会学研究』38、44-49頁
 天野郁夫 1992『学歴の社会史—教育と日本の近代—』新潮社
 広田照幸 1999『日本人のしつけは衰退したか』講談社
 海妻径子 2004『近代日本の父性論とジェンダー・ポリティクス』作品社
 Kinmonth, E. H., 1981, *The Self-Made Man in Meiji Japanese Thought: from Samurai to Salary Man*, University of California Press（広田照幸他訳 1995『立身出世の社会史—サムライからサラリーマンへ』玉川大学出版部）
 小針誠 2005『〔お受験〕の社会史—都市新中間層と私立小学校』世織書房
 小山昌宏 2008「1920（大正9）年から1930（昭和5）年の大衆社会状況—昭和初期の都市大衆と農村民衆の生活水準について」『東京外語大学留学生日本語教育センター論集』34、105-121頁
 小山静子 1990「家庭教育の登場—公教育における『母』の発見」谷川稔他『規範としての文化—文化統合の近代史』平凡社、241-267頁
 小山静子 1999『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房
 小山静子・太田素子編 2008『「育つ・学ぶ」の社会史』藤原書店
 文部省調査局 1962『日本の成長と教育—教育の展開と経済の発達』（再録：文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad196201/hpad196201_1_001.html）（2015年11月30日確認）
 中内敏夫 1987「家族と家族のおこなう教育—日本・17世紀～20世紀」『一橋論叢』第97巻第4号、55-80頁
 太田素子 1994『江戸の親子』中央公論社
 沢山美果子 1990「教育家族の誕生」『〔教育〕—誕生と終焉』藤原書店、108-131頁
 須藤功 2006『写真ものがたり 昭和の暮らし 6 子どもたち』農文協
 多賀太 2012「『教育する父』の意識と行動—中学受験生の父親の事例分析から—」『教育科学セミナー』第43号、1-18頁
 多賀太 2014「近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察—私の履歴書 経済人—からの抽出事例を用いて—」『関西大学文学論集』64（3）、27-54頁
 吉田昇 1953「自伝による家庭教育の研究」『野間教育研究所紀要』第10輯、245-282頁
 吉田忠雄 1964「日本のホワイト・カラーの社会生態」明治大学政治経済研究所『政経論叢』第32巻4号、1-24頁

追記

本稿は、科学研究費助成事業（基盤研究C）「近代日本における父親の家庭教育参加に関する歴史社会学的研究」（課題番号 25381151 研究代表者：多賀太）の成果の一部である。